

代表的パーソナリティ障害の独自性とオーバーラップの背景要因の検討

The Background factors of Originality and Overlap of Represent Personality Disorder

山口 千晴

Chiharu Yamaguchi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : 成人愛着スタイル, パーソナリティ障害, 被養育体験

Key words : Adult attachment style, Personality disorder, A raised Experience

1. 研究目的

青年期は、恋人や特別に親密な友人といった重要な他者の出現などにより、対人関係のあり方がそれ以前のものとは異なってくる時期である。また青年期は子どもから大人への移行期間であり、不安定な心理状態となる。そのため境界例的な心性がみられるといわれる。一方、市川・望月(2013)が一般の青年を対象に行った研究においては、境界性パーソナリティ障害傾向、依存性パーソナリティ障害傾向、回避性パーソナリティ障害傾向(以下パーソナリティ障害をPDと表記する)がみられることが明らかになった。これより、こうした傾向には個人差がみられると考えられる。ではなぜそれらの傾向には個人差がみられるのか。そこには愛着の問題が関連しているのではないだろうか。

Saver&Hazan(1987)は各成人愛着スタイル別にみられる幼児期の家族関係、父親や母親に持つ印象、これまでの恋愛経験の差を示した。そこで、成人愛着スタイルのアンビバレント型・回避型それぞれの特徴と境界性PD・回避性PDの特徴を比較してみたところ、境界性・回避性PDは共通して自信のなさという特徴を有しているとともに、境界性PDにおいては見捨てられ不安がみられること、回避性PDにおいては拒否されることを避けることによる親密性の回避がみられることなど、それぞれ成人愛着スタイルのアンビバレント型と回避型の特徴と類似するものであった。以上のことから、青年期にみられるPD傾向の表れ方には、それぞれ個人が有する成人愛着スタイルが影響を及ぼしていると考えられるのではないだろうか。

そこで山口(2017)が、成人愛着スタイルが青年

期における親密な二者関係に及ぼす影響を境界性PD・回避性PD傾向と関連付けて検討したところ、各PD傾向にみられる複数の特徴のうち、それぞれの成人愛着スタイルが独自に影響を及ぼしている特徴もあれば、重複して影響を及ぼしている特徴もあることが明らかになった。これは、市川ら(2013)が、DSM-IVにおける複数のPDの合併診断の頻度の高さを指摘しており、それらの背景要因についての検討が不十分であると問題視している点と関連しているだろう。

また、実際の臨床場面においては、「自信の低さを隠し持っている」、「理想化とこき下ろしがみられる」、「大事な場面で逃げてしまう」などの特徴をもつ自己愛性PDが境界性・回避性各PDとの区別が困難であるとの指摘も存在する。

適切でない養育体験により、「自分は世話をされるのに値しない人間だ」という自身に対する信念が形成され、それが自信のなさへとつながると考えられるだろう。自信のなさは各PDに共通する特徴であるため、予想される主な結果としては、被養育体験において形成された自信のなさが各PDの特徴のオーバーラップに影響を及ぼすとともに、養育者との間の親密性の差異が各PDの特徴の独自性に影響を及ぼすと考えられる。

これまで愛着とPDとの関連研究は、境界性PDにおいては多くなされてきたが、他のPDと愛着との関連を取り扱ったものは少ない。よって本研究では、境界性・自己愛性・回避性PDの独自性とオーバーラップの背景要因を成人愛着スタイルという観点から明らかにすることを目的とする。研究1においては、山口(2017)の研究に新たに自己愛性PD条件を追加し、複数の成人愛着スタ

イルが各 PD 傾向とどのように関連しているかを量的に再確認する。また山口(2017)で使用された成人愛着スタイル尺度(託摩・戸田, 1988)は、3分類モデルであったのに対し、近年では中尾・加藤(2004)の2次元・4分類モデルの成人愛着スタイルの使用が主流となっている。尺度の使用にあたり、本研究では、概念的により洗練されるとされる中尾・加藤(2004)が作成したものを使用する。研究2においては、研究1の結果を踏まえ、各 PD の独自性ならびにオーバーラップの背景要因について、量的研究からは明らかにならなかった詳細を質的研究によって探索的に明らかにする。

複数の PD との関連を扱う愛着研究として新しい知見を見出すことができ、より多角的な視点から PD を理解することが可能となる。さらに PD と愛着スタイルとの関連が明らかになることで、カウンセリング場面においてクライアントがどのような態度を示すか、あるいはどのような転移が起こりうるかが予想しやすくなるだろう。明らかになった結果をもとに、どのような介入がより効果的な援助につながるかも示唆する研究となるだろう。

2. 研究実施内容

研究1では、調査協力者の成人愛着スタイルと有する PD 傾向を Web 上の質問紙を用いて量的に分析する。使用する質問紙の構成は以下の通りである。なお、設問2の境界性 PD 傾向尺度においては、過激と捉えられる記述がみられたため、web 上で公開する際の倫理的な配慮として、該当項目の表現を一部変更した(例:変更前「興奮すると自分でも訳がわからなくなる。実際に自殺をしようとしたり、手首を刃物で傷つけたこともある」→変更後「興奮すると自分でも訳がわからなくなり、実際に自分を傷つけたことがある」)。

設問1: 相談歴の有無

設問2: 成人愛着スタイル尺度(中尾・加藤, 2004)

設問3: 市川・望月(2013)において使用された境界性 PD 傾向尺度

設問4: 自己愛的人格項目群(相澤, 2002)のうち対人過敏因子、権威的操作因子、自己愛的憤怒因子の22項目

設問5: 市川・望月(2013)において使用された回避性 PD 傾向尺度

研究2では、研究1の結果をもとに、各 PD を持つとされる臨床群の調査協力者にインタビュー調査を行う。またその際はインタビューガイドを用いるとともに、成人愛着スタイルと有しているとされるパーソナリティ障害を確認するために、研究1で使用した質問紙にも回答を求める。インタビュー内容は M-GTA を用いて質的に分析する。

尚、本研究は平成28年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得て行われた(承認番号: 29-014, 29-015)。

研究1は2017年12月26日から2018年3月6日に web 上で実施された。調査協力者は115名であり、うち有効回答数は111であった(有効回答率96.5%)。平均年齢は26.59歳であった。

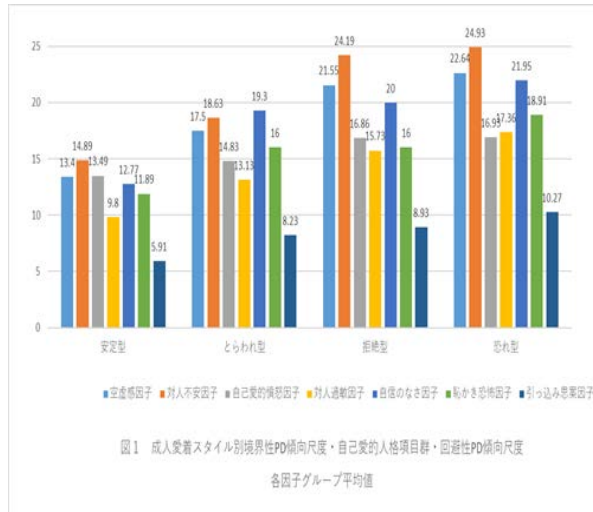
成人愛着スタイルは床効果の見られた1項目を分析から除き、中央値によって被験者を4群に分けた。分類の結果、各類型の割合は、安定型35名(31.5%)、とらわれ型40名(36.0%)、拒絶型14名(12.6%)、恐れ型22名(19.8%)となった。

各 PD 傾向尺度においては、境界性 PD 傾向尺度で床効果の見られた5項目、自己愛的人格項目群で天井効果の見られた1項目を分析から除き、因子分析を行った。その結果、境界性 PD 傾向尺度では空虚感因子が、自己愛的人格項目群では対人不安因子・自己愛的憤怒因子・対人過敏因子が、回避性 PD 傾向尺度では自身のなさ因子・恥かき恐怖因子、引っ込み思案因子が抽出された。

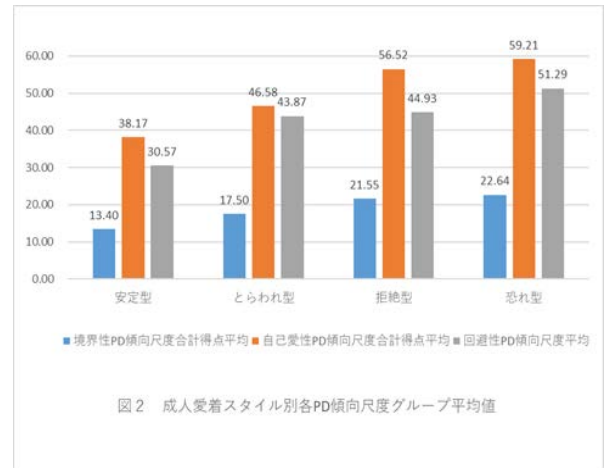
成人愛着スタイルの4分類を独立変数、境界性 PD 傾向尺度・自己愛的人格項目群・回避性 PD 傾向尺度の各因子ならびに合計得点を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

各因子の合計得点を従属変数とした結果を以下に示す。空虚感因子($F(3,107)=15.39, p<.00$)、対人不安因子($F(3,106)=23.18, p<.00$)、および対人過敏因子($F(3,107)=23.67, p<.00$)においては安定型ととらわれ型、拒絶型、恐れ型の間と、とらわれ型と拒絶型、恐れ型の間には有意差が認められた。一方、拒絶型と恐れ型の間には有意差は認められなかった。自己愛的憤怒因子($F(3,107)=4.00, p\leq .01$)においては安定型と拒絶型、恐れ型との間に有意差が認められた。一方安定型ととらわれ型の間およびとらわれ型と拒絶型と恐れ型の間には有意差が認められなかった。自信のなさ因子($F(3,106)=22.80, p<.00$)、恥かき恐怖因子($F(3,105)=11.69, p<.00$)、および引っ込み思案因子($F(3,107)=11.36, p<.00$)にお

いては、安定型ととらわれ型、拒絶型、恐れ型の間に有意差が認められた。一方、とらわれ型と拒絶型と恐れ型の間に有意差が認められなかった (図 1)。



尺度合計得点を従属変数とした結果を以下に示す。境界性 PD 傾向尺度 ($F(3,107)=15.39, p<.00$) と自己愛的人格項目群 ($F(3,106)=28.86, p<.00$) においては安定型ととらわれ型、拒絶型、恐れ型の間と、とらわれ型と拒絶型と恐れ型の間に有意差が認められた。一方、拒絶型と恐れ型の間には有意差は認められなかった。回避性 PD 傾向尺度 ($F(3,104)=24.40, p<.00$) においては安定型ととらわれ型、拒絶型、恐れ型の間に有意差が認められた。一方、とらわれ型と拒絶型の間、拒絶型と恐れ型の間には有意差は認められなかった (図 2)。



3. まとめと今後の課題

研究 1 の結果より、成人愛着スタイルの分類間に有意差がみられなかったことから、各 PD に複数の成人愛着スタイルが重複して関連していると考えられる。しかし、全ての結果で有意差がみられなかった拒絶型と恐れ型は、ともに他者感はネガティブであるが、拒絶型は自己感がポジティブであるのに対し、恐れ型は自己感がネガティブであるという概念的相違がある。自己の捉え方は、本研究において PD のオーバーラップの背景要因を明らかにするために重要な視点となる“自信のなさ”に深く関わるものだろう。よって、概念的相違があるにも関わらず有意差が認められなかった要因を、研究 2 のインタビューにおいて明らかにすることを今後の課題とする。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 29 年度大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2936)より研究助成を受け行った。